はじめに

今年は昭和 37 年 10 月 28 日(1962 年)に社団法人日本紅卍字会(設立登記日昭和 37 年 3 月 20 日)が発足してから 50 周年にあたる。日本で最初の道院である神戸道院が大正 13 年 3 月 6 日(1924 年)に発足してから数えると 88 年になる。紅卍字会は道院の外慈機関であり、道院を体とすると紅卍字会は用の関係にある。中国における最初の道院は 1921 年旧 2 月 9 日済南に創設された。日本では同年 2 月 12 日に第一次大本事件が起きている。中国における正式な道院の発足は、同国政府に認可された 1922 年の立春である。同年 10 月には世界紅卍字会が北京に設立された。したがって神戸道院は、まさに道院の萌芽期において中国国外に初めて設立された道院なのである。日本の院会(道院・紅卍字会)の歩みを知るには、日本紅卍字会が発足する以前にまで遡らなければ全容を知ることは出来ないので、過去の会報や大本の資料『神の国』、『真如の光』等を通して日本の道院の発足から振り返ることとする。(文中敬称略、写真 1～12 は大本本部提供)

１．日本における道院の発足

日本における道院の発足は、綾部の大本本部における二人の人物の会談が契機となった。一人は大本の出口王仁三郎(道名尋仁)であり、もう一人は世界紅卍字会済南分会会長の侯延爽(道名素爽)である。

大正 12 年 9 月 1 日(1923 年)関東大震災が発生した折、北京の世界紅卍字会中華総会は神命に従って、ただちに白米二千石(約三百トン)と銀二万元の救済品を東京震災復興局に届けた。その時、侯素爽・馮(ふ)華和・楊円誠の三氏が神命で派遣されたが、その使命は日本に於ける新しい宗教団体の中に道院・紅卍字会とその主義目的を同じくする団体を捜し求めて提携すること、及び日本の神戸に道院開設の準備をすることの二つであった。

いくつかの宗教団体と接触したものの提携するに足る団体とは巡り会うことができないまま、侯素爽と楊円誠は神戸に向かい、専ら在日華僑に対して佈道に努めた。当時大阪・神戸に駐在の中国正副領事・教育者・中華商会会長・特派員・実業家江朝宗等数名が求修し、これが日本に於いて佈道された最初である。その後、一人日本に残った侯素爽は、林出賢次郎(尋賢、当時南京領事で後の日本紅卍字会会長)の紹介状を手に 11 月 3 日、綾部の大本を訪れるに至り、翌 11 月 4 日、出口尋仁と面会した。尋仁は大本の救世の神業について詳細に語り、キリスト教の信仰を持つ侯素爽のバイブル聖句の疑問点をも明快に解決し、更に『霊界物語』第六巻三大教五大教の提携合体の所を指し示して、貴方の来られることは既に神界から知らされており、道院・紅卍字会こそ世界の五大宗教を統合する聖なる宗団であり(五教同源)、万教同根を主旨とする大本と手を携えて世界に平和を来たらすことは神界の御仕組みであるとし、侯素爽もこのことに非常に讃嘆して、大本と道院の全く不思議な神縁を喜び、急転直下僅か数時間にして大本と道院との提携協力が決定した。

また尋仁は神戸道院の創設に自らを任じ、諸事概ね見通しがついたので、大本信徒北村隆光(尋宗)を大本の代表として侯素爽と共に北京総院・済南母院・天津道院に差し向け参拝させた。尋仁と尋宗の道名は北京総院で下賜されたものである。尋宗は侯素爽に随って済南母院に参拝後、直ちに神戸道院に奉斎する御神位を奉持して日本に帰国した。

侯素爽は前清時代の進士で、日本留学(早稲田)の経験もある裕福なキリスト教信者であった。尋仁を大変崇敬し、以後神戸道院の開設や、東瀛佈道団の随行等を通して日本院会の発展に寄与することとなる。また、昭和 5 年 11 月(1930 年)から昭和 6 年 11 月(1931 年)までは、尋仁の勧めによって亀岡に移住し大本瑞祥会道慈課長として奉仕した。写真からも窺えるように洋服の似合う実に温厚そうな風貌だが、関東大震災救済の受け入れ側の当事者でもあった林出尋賢は、侯素爽は高雅な紳士だったと述懐している。

写真１　尋仁と侯素爽　昭和４年10月５日
大本東海別院にて～大本写真資料99-34

２．神戸道院の開設

大本と道院が提携した翌年の大正13年３月６日(1924年)、神戸道院は六甲村高羽の大本信徒片岡春弘の別荘に於いて日本で最初、かつ中国大陸以外では最初の道院として開設された。御神位は先に北村尋宗が済南母院より奉持して大本に仮に奉斎してあったが、前日に尋宗がお供して道院に入り奉斎した。『道慈綱要大道編』(巻二)には「大道東行の基、ここに肇れり」として、開設式の盛況が記録されている。この日の求修者乾方三百余人、坤方百余人の排名がまず行われた。道院の篇額には「瀛清光神」、女道徳社の社額には「仁慈和祥」の四字を賜った。その後統壇が開かれたが、扶乩の四方である纂襄宣録が充分に合霊し得なかった為、老祖が親しく臨壇されての和文の訓を下賜され、釈迦が道歌を一章作られたのみであった。和文(漢字とカタカナ)の壇訓は、今日に至るまでただ此の一次のみのようである。原文のまま慎んで再録する。(但しひらがなは補足したもの)

老祖訓：

「老祖妙山ヨリ臨ム。予ハ妙山ノ妙風ニ乗りて神島ヲ漫遊し来る。神モ亦会ス。今日は何なる日ト云者や。十二万年前ノ神国記念日ナリ。昔北洋にモ神国アリ。南泳にモ神国アリ。皆善ヲ好む。今迄遂滄桑ニ次変遷。光陰の速カナルコト白駒隙ヲ過キ。るが如し神ノ国ハ。昔モ道ノ国ト称したり。道ハ旨趣。頗る繁雑ヲ極ム。枝葉説明スルコトハ堪ヘナキノテ(堪えないので)。茲に一言以テ之ヲ蔽。へば道の結所の果ハ。和平博愛空虚寂滅慈悲歓喜清真忠恕ナリ」

次いで、

仏祖釈迦如来の臨壇があったが、宣者も録者も伝者も茫然としていた。そこでこの三役の

「茫然たるは機の尚未だし也。乩の尚未だし也。基の尚未だし也。老祖の命を奉じ、諸神の代表となりて、道歌を作る」と、乩示があって百六十六文字の道歌のみが授けられた。当日、纂方の一人華和が病気の為、日本人の尋宗がこれに代わって、纂方の慧琴の助手(襄方)を勤めた。宣者(沙盤の文字を判読する係)は西村光月、録者(壇訓の記録係)は横尾敬蔵、外山豊二、伝者(補佐役)は済南母院道監 侯素爽であった。また、侯素爽に対して道の宣明について解説後、指坐四度をすべしとの訓があり、侯素爽はこれに基づき実行した。日本で最初の道院開設式の壇訓で、既に坐の指示が出されていたわけである。

神戸道院の役職は代理統掌に江朝宗(慧濟)、代理院監に楊円誠、責任統院掌籍に尋仁、坐院掌籍に侯素爽

等であった。この時尋仁は既に満州へ出発していたので、開幕式典には列席せず、出口宇知麿(悟天)がその代理を務めた。

神戸道院は開設翌月の 4 月 20 日、六甲村からより便利な神戸市中山手通 3 丁目にあった庭園付きの洋館に移転した。移転後は日中両国の求道者の来訪がますます多くなり、入会者は日本全国・台湾・満州・朝鮮半島の各地から集まり 700 名を超えていた。

翌大正 14 年 2 月 23 日(1925 年)には神戸道院開設 1 周年記念会が行われた。「あらゆる宗教を抱擁帰一する道院でなくては醸し得ぬ頗る自由な気分を漂わせて、愉快極まり無く心の底から祝った」と、大本機関誌『神の国』(大正 14 年 3 月 10 日号 P75～)にその盛況振りが記載されている。様々な宗教者 12 名による熱のこもった講演があり、「各種宗派の人々、各種階級の人々が和気藹々裡に遠慮なく各自所信を披露して信仰という一念に燃えたる純真なる国際的会合は世界永遠の平和を希望する宗教聯盟、萬教大同の先駆となすもので、おそらく地上天国を招来するべき階梯として世界に向かって初範を示したものだとの念が各自の胸深くに刻まれ、道院の発展を心から祝福した」と結んでいる。会員は既に 1000 名に達していた。

写真 2　神戸道院全景
～『神の国』(大正 13 年 3 月 25 日号)

画像データー不備のため一時的削除

写真 3　神戸道院での扶乩の模様
～『神の国』(大正 13 年 3 月 25 日号)

写真 4　市内に移転した神戸道院
～大本写真資料 101-2

写真 5　神戸道院の御神位
～大本写真資料 101-4

３．世界紅卍字会東瀛佈道団の来日

神戸道院が設立されてから以後 6 年間、北村尋宗は数回に亘って中国の各道院・紅卍字会を訪れたが、中国大陸の修方で専ら佈道の使節として日本に来訪した者は一人も無かった。昭和 4 年 3 月 22 日(1929 年)、奉天に於いて大本の西島佐一(宣道)は瀋陽道院へ参拝して侍壇し、

老祖の訓を拝受した。

「大千同に化して一本に帰すべし……宣道の来れるは東瀛の道を宣して西欧に及ぼさんが為にして、此の中の至機(しくみ)は皆定数有る也。……」と。壇が終わるまで神戸道院で求修した宣道が参列していることを中国同修は気付かず、本人が名乗り出て初めて壇訓の意味が判ったという。またその頃、大本人類愛善会奉天支部長の富村順一の発起に依る紅卍字会と人類愛善会の提携協助を目的とした懇親会が行われ、日本佈道教化の動機ともなった。大陸での世界紅卍字会会員は既に百万人に達し、北京に総会を置き国内二百余所に分会が設けられていた。この様な経緯を経て、昭和 4 年・5 年(1929 年・1930 年)に、第一次・第二次・第三次の東瀛佈道団一行が日本を訪れた。

第一次東瀛佈道団は昭和 4 年 9 月 18 日の朝、瀋陽東北主会を出発、主として神戸道院及び紅卍字会を視察し、兼ねて東京に院会を設け道慈を宣揚するという任務を成し遂げ、10 月 18 日朝安東(丹東)に帰国した。一行の団統は安東分会会長の王性真・団監兼宣道使書記侯素爽・陶道開・団監宋永明・日記係は任惟登等、総勢 18 名より構成された。尚、団員には西川那華秀(尋化)と西島宣道の大本修方二名が加わっていた。

第一次東瀛佈道団によって開院した道院は日程順に、当時大本瑞祥会本部が置かれていた綾部に大和中央主院、亀岡に日本総道院行院、愛善会大阪支部に大阪道院、東京愛信会に東京総院、及び帰途途上における、京城(ソウル)の韓京道院であった。開沙は神戸が五回、亀岡と大阪が二回、東京が三回、京城が一回であった。また求修者には指坐も行われた。亀岡での書画壇では、

老祖は親(みずから)ら臨壇し、東京総院の横額として「中和化育」を賜った。尋仁には

grand god(老祖) 及び五教より数多くの書画が下賜されたが、道院開設以来未だ見なかった程の創挙(原文のまま)であったと東瀛佈道日記に記録されている。

御神位は弥勒仏の訓示により大本の御神体と合祀して奉斎する便宜上、正式の道院の御神位よりもはるかに小さい長さ四寸七厘、幅二寸七分の形式が示された。正面は楕円形の炁胞内に老祖及び五教教主の御神号を正位と同一に書き、背面には以下の説明を宣道使の程妙因に記述させた。

「至聖先天老祖は又太乙老祖と称し、即ち一炁万霊を孕み育てる所の大主宰であり、また即ち天之御中主大神である」(『道慈綱要』大道篇第二巻 203 頁)

また、蓮台聖(観世音菩薩)は、大本の奉斎する十陰陽極(十曜の神紋)は即ち、老祖の意也。これに礼拝して彼に礼拝せざるは不可なり。彼とこれとに礼拝することも不可なり。これまさに道院と大本の御神体を合祀して奉斎する時に当っては、宜しく御神位を一つにして二つにすべきにあらざるなりと明らかに訓示された。このためこの御神位を奉斎したのは神戸道院と東京総院とに限られ、お供物も一つにされたようである。(大本機関誌『神の国』－昭和 4 年 12 月号 P20)

道院の主な役職は、尋仁を日本総院統掌、井上留五郎(神吉・大本瑞祥会会長)を責任統掌、尋宗を院監、東島意威之吉(建道)を首席責任統掌に任命した。大本二代教主出口澄(承仁)は日本女道徳社総社長に任命された。また団統の王性真は呈判してから、持参して来た個人用の宗監道服及び道宝五尊を尋仁に贈呈した。

佈道団の一行が日本各地に赴いた際には、凡そ大本の支部のある所では駅を通過する毎に多数信徒が旗を

持ちこれを打ち振って歓迎と歓送の意を示した。10 月 6 日朝の東京駅到着時には中国公使は特に代表を派遣して歓迎した。各地で在日華僑の協力も得られたが、特に大阪道院の開設には大きな推進力となった。

東京では東京市長堀切善次郎が、世界紅卍字会が関東大震災の折に急遽来日し救済したことへの深い感謝を表す為、市民を代表して 10 月 9 日に帝国ホテルに於いて歓迎の宴を設けた。

10 月 11 日東京総院開設後の翌 12 日朝、東瀛佈道団は東京を出発し帰途に就いた。尋仁は亀岡に於いて侍壇した時、母院と総院を参拝することを誓願して妻承仁を伴ってこれに同行し、中国大陸に向かった。神命によって侯素爽は接待主任に任命され、陶道開は先に帰国させ母院総院に於いて接待の準備を進めさせた。16 日は京城にて韓京道院を開設し、18 日朝に安東に帰着した。

安東道院では、弥勒仏より「各修方のこの度の東瀛に佈道した成果は極めて良好であった。中和の因縁は既に昔から孕育されていたので、和やかにして美しき果実は、また必ず将来に収穫せられるものである」との訓があった。王性真団長は一切の事務を終結し、ここに第一次東瀛佈道団の任務は完了したのであった。

翌 19 日朝、尋仁一行は瀋陽駅に到着した。出迎えたのは瀋陽東北主会及び女社の役職員、学校生徒の外、東北・満州の各分会の代表者 500 余名と熱烈な出迎えであった。しかしながら時局不安定の為、母院と総院への参拝は中止せざるを得なかった。尋仁は宗永明らと話し合い、日本各地の大本瑞祥会の支部 500 余箇所を帰国後順次道院とすることを期すこと、今後道院の壇訓、紅卍字会の誌報と大本愛善会の出版物を相互に交換し参照研究に資すべきこと、相互の言語不通の不便を解消するため瀋陽の紅卍字会と愛善会の共同で方言学社の設立を計画すること等が議決された。その後、尋仁一行は長春道院とハルピン道院を参拝し、大歓迎の内交流を深めて 10 月 30 日亀岡に帰着した。

写真 6　前列右から 3 人目、王性真・尋仁・承仁・侯素爽　昭和 4 年 9 月 30 日亀岡月宮殿瑞月門前にて
～大本写真資料 100-3

画像データー不備のため一時的削除

写真 7　亀岡大祥殿での扶乩の模様
～大本写真資料 101-5

写真８　道服姿の尋仁と二代教主承仁
～『神の国』(昭和５年３月号)

写真９　中央 尋仁と承仁、向かって左 王性真、向かって右 井上神吉
昭和４年10月18日、安東道院にて～大本写真資料36-28

写真 10　中央 尋仁、向かって右 侯素爽・西島宣道、向かって左 西川尋化
昭和 4 年 10 月 21 日、長春道院にて～大本写真資料 36-30

壇訓の紹介

第一次東瀛佈道団による扶乩は、神戸が五回、亀岡と大阪が二回ずつ、東京が三回行われた。どこでも老祖降臨による壇訓であり、初めての佈道ならではの親しく接し説かれた内容である。全文読むべきものであるが長くなるので、その中から一部の壇訓を以下に慎んで抜粋する。

・尋仁について

老祖訓(神戸 9 月 23 日)：

「尋仁一団の和気は多くの信徒と異なり、霊光の瑩(あきらか)なること常人に倍す。誠に衆生の光明にして濁海の導師なり。惟うに世界の平和は人に在りて道に在らず。道運に定数あり、変化極めて当然なる理由有りと雖も、要は爾(なんじ)ら人心を以って転移するに在り。故に人心善なれば世界は善なり。人心悪なれば世界は悪なり。人心平かなれば世界は平かなり。人心安んずれば世界は安んずるなり。人の心を以って天の心を悟る。これ故に大道は自然を以って法則と為すなり。尋仁の天性として生まれながらに受けたる所は人と同じきのみ。その誠なるに因る故に能くその道を成し、その信ずるに因る故に能くその心を成せり。これ僅かに日本一国の明哲なるのみならず、亦東亜大陸の先覚者なり。その悟る所を以ってすれば、僅かに東亜一方の危を安んずるに関わるのみならず、その行ずる所を以ってすれば実に以って世界人群物類の平安を奠(さだ)むるに足るなり。故に曰く仁者は天に相するに、必ずその道を尋ねて自然に帰するのみ。汝今日神戸に来れるは、これ特に汝一人の修養に得る所あるのみならず、爾無く我無く、一胞共に育つの妙は、尤(もっと)(原文のまま)も能くこの玄黙の中に於いて、世界危機の十分の四を化したり。此の行此の志を堅く守り常に保つことを切望す。魔障に乗ぜられて、憂患に陥ること勿れ。汝それ之を先記せよ。これ嘱すること切なり、記せよ」

・日本人と中国人の違い

老祖訓(亀岡 9 月 30 日)：

「日本人の天性はその信仰を進行する道程に於いて外より内に至り、即ち外分的のものより内分的のもの

に至る故に狡(わるがしこさ)に似て而して実也。中国人の天性はその修道の経路に於いて内より外に至り、即ち内分的のものより外分的のものに至るので、実に似て狡也。故に中国は今日に至っては教を以って、その行動を制約することは出来ない。日本人はなお教を以って行為を制御することが出来る。そのかくの如き理由は、日本人は実にして狡に似たるものなるが為に、神教の法則を以って、能くその狡を抑制して本質の実に帰るを得るが故也。中国人はそれが出来ないので、必ず自然の本質を以って、その自ら度するものを度せしめ、その自ら覚る者をして覚らしめ、その能わざる者は、またただの道の裁判に任せてその昇降を定むるのみにして、神教の法則を以って之を制御するを得ざる也」

・大本と道院の理一にして事異なるもの

老祖訓(亀岡 9 月 30 日):

「老人、霊を仁子(尋仁)に接して、万能の智慧有らしめ以って群衆を導かしむると。

老人が霊を沙木に授けて、間接に霊を纂職者に顕すとはその理一にして事異なる也。大本の信徒が仁子の能力に従いて、聖霊の満つるを信ずるは、またなお道院の修方が訓文理義の精を信じて、神霊の明を感ずるとその道は一也。これを以って今の世に処し、度世化人の功を行わんとするに、大本と道院のその理と道が一なることを明らかにせざれば、以って世を安んずるの効を修むるに足らず。その異なる点を相たすけて以って和する非れば、以って清寧の功を奏する能わざるなり。故に今日を以って謂えば、中の道院は即ち日本の大本にして、日本の大本は即ち中の道院なり。……惟うにこの中国と日本の結合は、大千世界の吉祥と平安を開くの大本也」

・道院は宗教なるや

老祖訓(亀岡 10 月 1 日):

「道院は宗教なるや。曰く、宗教にあらざるなり。宗教なる者は、宗(もと)に専らする所有り、教に依る所有り、只これに宜しくして彼には宜しからず。之を宗教と謂うなり。道院なる者は自然を以って帰依と為し、平易を以って習慣と為し、己の長(すぐ)れたるを誇らず、他人の短所を言わず、人の修するを強いず、自己の善をあらわさず。故に行くにも自然にして、止まるにも自然なり。我は良く人が悪いと謂うことも無く、また人は善く我が悪いと謂うことも無い。要するに善を以って人と之を同じくする主旨で、凡そ行う所有って善道に相合する者は皆我なり。故に道院を設立するは、乃ち世界宗教の純粋の意義を研究して本源の一に復帰する場所の意であり、所謂統一して之を教化するものではない。各修方が若し能く世界の善修の士を集めて一ヵ所に聚合し、共に一正の帰する所を明らかにすれば、随所を皆道院と為すべきである」

・東亜の要

老祖訓(大阪 10 月 3 日):

「中華人民の来たりて吾道を修する者は、大阪に於いては均しく道基のたよりと為す者である。即ち世界の危うきを安んずるの光明の機は、東亜に繋り、東亜の枢は中和に結ばる。若し中和各々その中を以って和を結び、各々その和を以って中を求むれば、即ち化育（貴賤上下が皆その位に安んじ、万物が皆十分に生育すること）大化の功は、無形の道に在らずして、而して形色の人群万類に在る也。これ

老人の爾等日本に居留する中華人民の人士に、中和の悟りの義をねんごろに告げさとす所以なり」

・一人の修道から

老祖訓(東京 10 月 10 日):

「一は数の基で、小なりと雖も、その実は大である。軽は重の本で微なりと雖も、その実は多である。故に百千万億より無量無辺までの称えることの出来ない、また名づけることの出来ない程の不可思議の数でも、亦必ず一から積み重ねたものである。高きに登るには必ず低きよりし、千里の行(あゆみ)もまた足下から始まるのも、亦その一時の止まりより動き変わり始めるのである。是をもって一人の心で世を安んじ、危を定めることが出来、一人の修道で、天を補佐して化育に賛ずることが出来るのも、また一人より二人三人四人五人と基を起せるものである。夫れ人は天地人三才の中枢にして、陰陽の相化する楔となるものであって、人が善なれば天地も亦善であり、人が修道すれば天地も亦修道するのである。これ天地の私を人に於いて行うに非ずして、実に人霊の息を以って天地に通ぜしめるのである」

４．日本総院の開設

昭和4年10月11日(1929年)に東京総院(日本総院)は、四谷南寺町(現須賀町)の愛信会に於いて開設した。

尋仁統監が宗監の道服を着用し、道宝(以上、性真より贈与)を佩びて斎主となり、この大祭典を行った。祭典は道院の最高の祭式である六献典礼の儀によって執行された。参列者は乾方250人、坤方190人、合計440 人であった。式典が終了して八度の休憩の後、日本総院としては最初にして、第一次佈道団の日本に於ける最後の意義深い統壇が開かれた。

日本総院統壇の壇訓：

「山及び海の諸々の神祇は、皆駕を迎えて院外に跪いて敬礼す。各教の教主は諸天の聖神仙仏及び世界各教の教主を率いて、共に神前に敬礼して傍らに侍して立つ。

蓮台聖、弥勒仏は、

老祖の命を奉じて前駆して至り、各教主及び三千大千世界の諸菩薩、摩阿薩に代わって、共に祝詞四言を奏上し、以って大道の真諦を述べて和総(日本の総院)の基礎を樹立する盛典を祝すと共に、この機をかりて汝等修道者に修を悟り、善を悟るために努力する方法を示すべし。各修方は固陋で時勢遅れの学者が細かい文章字句の末を詮索する如きにならって、片寄った計画や拙劣なる仕事を為すこと勿れ。各修方はよくそれを記して遵うべし。

有生於虚悟先天　陰陽変化本自然　形色久暫任養侯　炁気息通霊一団

(初詩大意：有が虚(無)に生れる、これより先天の炁霊を悟ることができる。先天の炁霊は陰陽の変化によって現れるが、しかし陰陽の変化は自然に基づくものにして、人力ではそれを如何ともすることができない。陰陽が変化して形や色に現れるが、その形や色の長く保てるや否やは、修養の功侯(はたらきと状態)如何によるものである。修養の功侯が進んで、先天の炁と後天の気相通ずれば、炁霊は一団となって、先天を悟り、虚から有を生じることをも悟ることが出来るのである。)

枢府の各級職掌は均しく駕に扈(こ)従して至る。

老祖妙山より来る。

大無外兮小無内　放巻隠顕運不匱　光天化日衆生楽　明霊常昭道普被

賜詩大意

(その大なることこれより外長く、小なること、これより内なし、之を放てば顕われ、巻けば隠れ、運化して尽きることなし、光明にして曇りなき世界に衆生は楽しみ、明霊常に照らして道は普く及ぶなり)

道院は宗教の機関であるか。曰く、そうではない、そもそも神仏を迷信する処であるか、曰く、これ亦そうではない。然らば道院は何の為に設立したか、人々は何事の為に集まるのであるか、曰く、世の中や人生

の生存と滅亡の根本教導を解決せんが為である。およそ人の天地の間に生きるとは、生と存の二事に外ならない。生きれば存在し、存在しなければ亡びる。惟うにこれが為に人は皆同じく生存を望むのである。しかして生存の道を謀る者は、その生存の正道に悖(もと)って、死亡の方向へ赴いているのである。それ故に「優勝劣敗」をもって、近代生活の標語とし、「競えば存在し、譲れば亡びる」を時代のはやり言葉としているが、ここに於いて殺機は既に生存の意志の中に伏在し、悲惨なる災刼が競争の場に現れるのである。天は覆わざる所なく、未だ一物たりとも枯死するを見ることなし。地は載せざるは無く、未だ一介なりとも棄てられしを見ることなし。これ生存が人の社会に於いては競っても生存し、競わなくても生存する。争っても亦生き、争わなくても亦生きるのである。苟しくもよくそれぞれ一個人の良知良能に基づき、己が生きる為に人の生きるのを損なうことなくして、己の生を生き、己が生存するために人の生存するのを損なうことなくして、己の生存を維持したならば、かくして競争の機は起こらず、惨酷の禍も亦自己の生存を謀るために起こることなく、又山河を鮮血で染め、深い谷を白骨で埋める様なことをしないで済むであろう。これ即ち競争して生存を謀ることは、人々をして生に安んじて共存する能はざらしめること、斯くの如きである。己が生きんが為に、必ず他人の生きるを害さんとし、かくて始めて自己を生かし得るものとすれば、若し更に第二の者が有って、これと同じく自己の為に謀ったならば、己の生存も亦己れが生存せんと謀る所にかなわなくなって、共に亡びるのではないか、これこそその生存を競争で謀る者の必ず深くこの妙処を悟って、生存の大道を尋ねるべき所以である。

しかも吾々の体は四大(風火水土)の仮に合した身であって、之を生くるも永からず、之を存しても長くないものであるから、この肉体を長く生存することを謀ることは、霊を悟るに及ばないのである。肉体が存すれば炁は存し、炁が離れれば肉体も存しないこの肉身に、又何ぞ必ずしも生死存亡の大肝要事として、仮の身のために謀るべきであろうか。これ即ち本道院が生存根本の道を以って、もろもろの衆生を導き、各々をしてそれぞれ己の生存を維持し、各々その生を生き四大を安んじて以って一真を定めんとする所以である。故に曰く、道院の創立は宗教の寄せ集めに非ず、乃ち平庸の大道を明らかに宣揚する為である。道院の修は役に立たぬまわり遠い道を守るに非ずして、人類進化の文明の道程であって、之に由れば僅かに身を立て、家を斉え、国を治め、天下を平らかにすることが出来るばかりでなく、之を修すれば実に能く天を補佐して化を賛(たす)け運会の光明を定めることが出来るのである。今日、時あたかも重陽の佳節に当って、和総道院の基を樹立し所在地を定めしことは、それまた東亜平和の光明の策源にして、世界人類の親睦の機を肇めるものである。望むらくは汝等諸修方はそれ各々この意を悟り、修道に努力し、よくこの理を明らかにして、以って己れの誠をつくしたならば、天地と共にその功を永にし、さらに日月とその明らかな徳を共にするのは、必ず汝等修道者が堅の一字を以って最後までつらぬく努力に在るのである。望むらくは、汝等諸修方はよくそれを悟って勉むるを可とす。各々記して遵え。……」

以下、佈道団の帰国時の注意事項の訓があった後、蓮台聖より矜躁偏急に失してはいけない旨の訓が続いた。午後四時に統壇を終了して、道院及び紅卍字会として為すべき一切の事務を指示に従って完了し、一同は老祖正位に礼拝して神界に対し明日帰国すべきことを奏上した後に記念撮影をして散会した。

５．第二次東瀛佈道団の活動

昭和 4 年(1929 年)冬、北京総会の訓示に依って李天真(瀋陽)・夏頴(えい)誠(栄口) ・西島宣道(瀋陽)、さらに後日、西川尋化(瀋陽)を加えた 4 名は、尋仁・承仁(大本二代教主出口澄)、及び神吉に下賜せられた図像板を持って日本へ赴くことになった。この当時陝西省の旱の災害は甚大で、冬季の寒冷も加わってその救援は極めて緊急を要する状態であった。中華総会及び分会の各首領は北京総会へ集合して協議し、日本へ人を派して募金をすすめ救済を促進することも図った。

図像板とは老祖が世界統一、平和の為に勢力魔王と称する魔王を言向けやはし(相手を言葉で和らげる意)給う景況を写真に撮って、それを二枚の板に貼り付けたもので、全 52 組作られた。その内日本に 10 組、南洋に 12 組、西洋に 16 組、残りが中国とアジアに割り当てられた。(大本機関誌『真如の光』ー昭和 5 年 2 月 15 号 P28)

図像板は現在何処にあるのかその所在ははっきりとしていない。

李天真等は昭和 4 年 12 月 7 日に瀋陽を出発し、主として西日本各地に 36 箇所の道院・紅卍字会を開設し、翌昭和 5 年 2 月 7 日に瀋陽へ帰着した。

写真 11　前列右より、西島宣道・夏頴誠・分所長・井上神吉・李天真・西川尋化
昭和 5 年 2 月 22 日、大本熊本分所にて道院開設～大本写真資料 99-11

6．第三次東瀛佈道団の活動

第三次東瀛佈道団は臨楡道院の梁慈果会長を団長として昭和 5 年 3 月 13 日(1930 年)に瀋陽を出発し、神戸に於いて二日間開沙、京都では一日開沙し二日間に亘って開催中の宗教博覧会を参観し、亀岡・綾部で開沙三回、東京で開沙一回行い、4 月 2 日に安東に帰着した。団員全 10 名、往復二十日間の佈道であった。

東瀛佈道団の主たる佈道の任務は、第一次は慈を施し、第二次は大道を示し、第三次では修諦を授けることであった。このため第三次では当時坐功第一の名声の高かった北京道院の周根浄会長が同行し、極めて意味深長な老祖訓を、霊を固める修諦(坐)をもってその要点を略言したのである。降ろされた壇訓の中にも、修道上の注意点が示されていた。

老祖訓(神戸昭和 5 年 3 月 16 日):

「現在中華と日本各地の大道を盛大ならしめる諸子が虔誠をとり守り、人世の異なる所より、共に霊界の同じ所へ赴くは、これ凡そ世界の道を同じくし、慈を同じくし、修を同じくし、志を同じくせる者が皆まさに着々として準備を進め、以って一より二に、五をつらねて六と為し、共に一止不変の真境に止まることを期するものにして、しかる後にはじめて大道を盛大ならしむる各子の功候を現すことが出来るのである。

その準備を進めんとするものは何であるか、即ち中華・日本両総会によって世界総会を組織することである。これにより徐々に発展佈道すれば普く化する功は克くその基礎を立てられるであろう。これ各修方の今回日本に来たれる功果である」

弥勒仏訓(神戸昭和5年3月17日):
「ただ求修した以後に、修め研めることこそ問題なるのみ。入修して能くつまびらかになすを得なければ、入修するも亦何をか云わんや。修に入るも亦何の益があろう」

老祖訓(神戸昭和5年3月19日):
「本道院の各修方は皆極めて虔誠であるとは雖も、平庸にして無為の大道と善く修める道の大本の異同を未だ徹底することが出来ないのである。然るに善を同じくし、修を同じくする点には未だ区別が有る訳ではない。今既に各々至誠の心を持ってこれを悟れば、この一善の誠悟に因って変化すること無きを得ないのである」

老祖訓(東京昭和5年3月25日):
「仁愛和平の卍字会を世界に展佈する機は、必ず日本の首都からでなければならないからである。その関係する所は極めて重大である」

綾部の扶乩により出口日出麿(運霊)は、大和中央主院責任宣霊統掌に就任した。一次から三次の佈道により、日本に430箇所の院会を設立せしめた。

写真12　尋仁と梁慈果(中央)、尋仁の真後ろ向かって左 正纂の侯義誠、右 襄纂の唐定敏
前列左端 加藤明子、前列右端 井上神吉、中列右端 出口悟天
後列左から二人目 北村尋宗　天恩郷高天閣にて～大本写真資料100-8

７．大本弾圧と院会の活動停止

東瀛佈道団の活動によって日本に430箇所の道院が設立されたのであるが、大本支部が即道院であり愛善会が即紅卍字会であった。内修に関して言えば、大本の鎮魂帰神は道院の坐と同じものと思われていたようである。(大本機関誌『神の国』－昭和4年12月号P25)

昭和6年9月18日(1931年)に満州事変が起こり大陸は政情不安定の中、排日運動が加速していくこととなる。このような情勢の時、出口運霊は4度中国大陸を訪れて、大本人類愛善会による愛善活動を各地に展開し、道院・紅卍字会からも期待を込めて歓迎された。

大連では昭和6年10月21日、済南母院と世界紅卍字会中華総会天津中央主会から招待されて、済南での

『北極真経』伝経時に侍壇した鄭嬰芝(ていえいし)と李智真(賓県知事)、及び許徳輝ら総院、母院等各地を網羅する最高幹部とも会談を行った。(大本機関誌『真如の光』－昭和 6 年 11 月 25 日号 P21)

自然災害時の相互援助では、昭和 7 年 1 月に大本側から中華民国水害見舞金を瀋陽の東北主院にて手渡した。一方昭和 8 年 5 月には、昭和三陸地震救援慰問のため安東道院の王性真会長が再び訪日し、東北地方を慰問した。日本への救援は昭和 36 年の第二室戸台風まで 10 回を数えた。

このような交流が続けられていたが昭和 10 年 12 月 8 日(1935 年)第二次大本事件が起こり、大本と共に道院・紅卍字会の活動も長い停止期間に入るに至った。尋仁統監は昭和 11 年 3 月 13 日、不敬罪と治安維持法違反で起訴されて翌 14 日京都・中京刑務所に収監された。

８．戦後の復興、日本総院会籌備処の設立

大本弾圧後、呉清源(弈霊)、大嶋豊(扶化)、小田秀人(普和)等によって「世界紅卍字後援会」が組織され、速やかに道院・紅卍字会を日本に再建すべくしばしば中国に代表を送り交渉したが、壇訓は「時期尚早」を示し「今後逆賭すべからざる時が来る。その後に神機至るであろう」というものであった。そのうち中国大陸での戦争はますます苛烈となり、後援会の活動もやめざるを得なかった。

尋仁統監は昭和 17 年 8 月 7 日(1942 年)、不敬罪無罪・治安維持法違反無罪で 6 年 8 ヶ月ぶりに保釈釈放となり、昭和 21 年 2 月 7 日(1946 年)、大本は愛善苑として新発足して尋仁統監が苑主となった。2 年後の昭和 23 年 1 月 19 日、78 歳で帰道し、昭和 34 年 3 月 2 日の済仏訓にて元化真君に錫位された。なお、承仁は昭和 27 年 3 月 31 日、69 歳で帰道したが同訓にて襄化大士に錫位された。

一方中国では道院・紅卍字会は活動を続け、終戦時には中国から引き揚げる多数の在留日本人・孤児難民及び軍人等の帰国に多大の救済を惜しみなく差し伸べた。しかし昭和 25 年(1950 年)、中国共産党支配により国情が一変したことにより、5 月 24 日神訓により香港に宗母総世界紅卍字総会駐港辦事所(総処とも言う)が開設するに至った。「宗母総」とは次の三つのことである。「宗」とは山東省濱県にある世界道慈渡化宗壇の意であるが、賓県が交通不便な為昭和 3 年秋(1928 年)、天津に世界道慈渡化行宗壇が設置された。宗職を任命する以外には道慈の事務は指示しない。世界紅卍字会総監察部がある。「母」とは山東省済南母院の意で、道の最高総枢であり道務一切に関する事項は母院の指示に遵って処理する。世界紅卍字会監察部がある。「総」とは北京に於いて成立した世界紅卍字会中華総会の意で、慈の最高総枢であり慈の発展、救済措置に関する事項は総会の指示に遵って処理する。世界紅卍字会基本執行部がある。以上の三つの役割を香港の辦事所が代わって行うのである。

日本総院会籌備処の設立までの経緯は、大本機関誌『神の国』－昭和 28 年 6 月号、「大本と道院・世界紅卍字会～土屋化同」に詳しく報告されているので、要点を以下に抜粋する。

昭和 27 年旧 8 月 20 日(1952 年)、林出尋賢、三五教(あなない)(昭和 24 年中野与之助設立、大本教の系統で万教帰一を主張)の中野教主ら一行 3 名が台湾道院に参拝した際、特統科壇が開かれて尚真人より将来の日本総院会籌備処設立に関する神示や、佈道団を迎えて道院・紅卍字会の復興を願うようではいけないとの訓があった。かくて日中道院同修の間において多年待望していた日本院会復興の諸問題が具体的に検討されるようになった。同年 10 月下旬東京に於いて、林出尋賢・呉弈霊・土屋弥広(化同)の三人により世界紅卍字会日本総院会籌備処の創設についての初めての会合が行われたが、尚真人の訓に「今後大本教、三五教の外、別に卍字会の籌備をなすべし。かくして自分一切の我見を免除し、新しき覚りの路に歩入すべきなり」と、明確に神示されたにもかかわらず三者の意見は一致しなかった。

昭和 27 年 11 月 18 日、大本開教 60 年大祭が盛大に開催されたが、日本に於ける院会復興に幾多の複雑な

事情があることから、宗母総とシンガポールは大本祭典への参加は取りやめたものの、台湾道院からは鄒蘇(すうわ)昶(ちょう)、蔓義澈(まんぎてつ)の二氏が参列した。10 月 30 日には南洋主院の処科壇にて孚聖より「今次の日本に於ける大道の進展推化は、大本の慶典を以って其機発動するなり」との訓があった。

このような中、日本の院会復興に関する具体的解決策の神示を仰ぐため、大本愛善使節海外派遣の第一弾として人類愛善会道慈課長であった土屋化同は、昭和 28 年 1 月(1953 年)香港及び台湾に向けて出発した。当時シンガポールの南洋主会で特処科が開かれていたが、香港からの呈判「日本道慈に関して速やかに列目呈請し神示を仰ぐため、処科壇が香港へ帰りて開壇することに伏して慈恩を乞う」に対して、済仏降壇して日本院会の当面する複雑困難なる一切の問題に対する解決策を伝えるために、処科壇が香港へ帰ることが許された。香港滞在の二ヶ月間に四回開壇され、今後日本院会のあり方を詳細に訓示された。

第一回の処科壇は昭和 28 年 1 月 29 日に行われ、孚聖より「化同と共に使節会談を挙行し、院会綱則章程、道慈運化の真理について詳細懇談し深く研求すべし」との訓があり、香港総処の王仁道会長をはじめ 18 名の監理と土屋化同とで使節会談が行われた。使節会談に於いて議決されたことは：

「凡そ道院および紅卍字会の組織設立は、須らく道院・紅卍字会の綱則系統によって処理すべきものである。想うに大本と道院・紅卍字会とは、すでに 20 余年の淵源があり、中間において該地政府の干渉を受けて一度停頓せるも、現在においては、すでに該地政府より活動を恢復する許可を得ている。すなわち日本院会の復興は、自ら大本が責任を負って進行すべきものである。惟うに院会は独立的性質のもので、いかなる一団体(三五教を指す)の内にも附属せしめる事は出来ないものである。大本の諸修方は須らく大本本部以外において、適所を求めて宜しく復興を計画すべきである。また本処は世界紅卍字会基本執行部の所在地である。すべて各国に於いて院会を設立せんとする時は、須らく本処と折衝すべきで、かくしてこそ綱則系統に合致するものであり、然らざれば綱則系統の許さざるところである」

即ち、日本に於ける院会復興は大本諸修方においてその進行の責任を負い、院会綱則系統によって組織すべきであり、道院・紅卍字会の国際性に基づいていかなる団体にも附属せずして萬教を包括し、世界平和の大神業を達成すべき事を使命づけられたわけである。さらに関聖(関羽)の訓示により、大本三代教主出口直日(耀宗)・出口悟天・土屋化同・三五教教主中野震甦・林出尋賢・北村尋宗・呉弈霊・鄒蘇昶・蔓義澈の九名が聯合委員に任命され、日本総院会籌備処設立を計画するように指示された。〜以上引用終わり

このような経緯を経て昭和 29 年 1 月 14 日(1954 年)、日本総院及び世界紅卍字会日本総会を設立するための日本総院会籌備所が、嵯峨保二(恒福)の厚意により銀座並木通北国新聞東京支社内の一室を借受けて設立された。初代処長は林出尋賢であった。土屋化同は月例道慈講話会を始めた。

写真 13　前列向かって右より、呉弈霊・出口悟天・林出尋賢
後列中央 土屋化同

昭和 31 年秋、籌備所は上野大本東京本苑に移転した。この頃から月 1 回香港総処から送られてくる壇訓の翻訳と講話会が始まった。昭和 32 年 1 月 15 日(1957 年)、『東瀛道慈月刊』が創刊された。この 3 年間の活動で籌備所の分所 8 箇所、求修者 900 名、月例道慈講話会 34 回に及んだ。

昭和 33 年 1 月(1958 年)籌備所が杉並区成宗に移転した。同年 6 月 15 日台湾の游篤慧(ゆうとくけい)が指導のために来日し、修道体験を語り多くの人に感銘を与えた。また、游篤慧は籌備所分所・大本教・救世教・三五教等、尋仁ゆかりの深い教団を訪問し連合を目指すものの大なる反応は無かった。同年 10 月再び目黒区本郷町に移転し、旧暦十五日に満月会を開催し修坐の研究指導が始まり、ようやく道院本来の修道に一歩近づいた。何回も移転を繰返したのは資金不足によるものだった。

昭和 33 年 2 月 11 日、済仏より、出口耀宗、出口悟天、林出尋賢、土屋化同に対して、道院・紅卍字会を正式に成立せよとの訓があった。昭和 34 年 4 月(1959 年)文京区高田老松町に移転した。新処長に大嶋豊(扶化、東洋大学学長)が就任した。東洋大学講堂等で道慈講話会や思想問題懇談会を開催し、毎時隆盛の一途を辿った。昭和 35 年 7 月(1960 年)世界紅卍字会日本総会建設委員会が設立され、委員長に大嶋扶化が就任し、昭和 36 年末までに建設資金として目標 2000 万円に対して 800 万円が集まった。昭和 37 年 1 月(1962 年)渋谷区原宿の山野千枝子持家に移転した。前年の秋には、かつて満州で事業を行っていた大本信徒で瀋陽道院にて求修した青井堅(宜珠)が忽然として籌備所に出現し、積極的な経済的協力を申し出ていた。

9．社団法人「日本紅卍字会」の設立

昭和 37 年 1 月 25 日(1962 年)、社団法人日本紅卍字会が厚生省から認可された。(設立登記日昭和 37 年 3 月 20 日)当初〔世界紅卍字会日本総会〕という名称で申請していたが、厚生省としてこのような名称の団体に社団法人を認可した前例がほとんどないとのことで交渉は難航したが、政府側の希望と香港総処側の意見を調整して〔日本紅卍字会〕とすることとし、厚生省の認可と香港総処の壇訓による承認を得た。日本紅卍字会という名称は、香港紅卍字会と泰国紅卍字会の前例によるものであった。初代会長には大嶋扶化、名誉会長には悟天、尋賢、弈霊が就任した。また、日本紅卍字会は慈善団体のため思想活動を行うことは出来ないので、別に「世界紅卍字会日本総会」と称する名義を並存させた。

同年 7 月 13 日、扶化、尋賢が香港を訪問した折、日本院会設立準備に当たって仰いだ香港特壇に於いて孚聖より「将来は日本より欧米に推し拡めて、光明を正大に発揚しなければならない。その職責は非常に重要である。さらに基礎が些かでも錯誤するところがあれば将来の偉大な発展に影響するから、つとめて心を虚しく公正にして慎重に審議、処理すべし」との訓があった。

昭和 37 年 10 月 28 日、東京原宿の籌備所に於いて強い雨の中、社団法人日本紅卍字会と日本総院会(日本における道院と世界紅卍字会の総本部のことであり、同時に道院も復興した。)の開所式が盛大に開催された。早朝から会場には参列者がつめかけ、開所式の始まる定刻午前 11 時 30 分には、野外にしつらえたテント張りの会場まで立錐の余地のない程の盛況振りであった。海外からは香港総処代表王瀾観、香港紅卍字会代表陳昭璿、台湾紅卍字会代表游篤慧、台湾分会代表鄒龢昶、嘉義分会代表許信玄、シンガポール紅卍字会代表杜咸葦、同女道徳社社長何仁英、及びクアラルンプール紅卍字会代表黄化徳、等多数参列した。游篤慧は 10 月 17 日に来日して開所式の準備や予行練習を連日寝食を忘れて行っていた。

正午から二階に設けられた祭壇の前で六献典礼の儀式を行い恭しく聖号百回を奉誦した。賜った扁額は「誠正和平」、女社は「韞嫺旭昶(おんかんきょくちょう)」であった。式典終了後、同所でパーティー式の直会があり、午後 5 時から芝の留園にて祝賀会が盛大に開催されたが和やかな雰囲気をかもしだしていた。日本側の参列者は二百数十人に及んだが、その中には文部大臣代理近藤春文、安岡正篤(陽明学者)、植芝盛平(合気道創始者)、豊道慶中

（天台宗大僧正）、宝井馬琴（講談師）、中村芝鶴（歌舞伎役者）、山野千枝子（美容家）ら名士多数がいた。

翌々日 30 日から、海外代表 6 名と日本代表 4 名計 10 名の一行は、小田原で病気静養中の呉弈霊を見舞った後、熱海の世界救世教を訪問した。31 日は大本亀岡本部を訪問した後、京都を経て伊勢二見ヶ浦に移動し 11 月 1 日に代表者会議を開催した。11 月 2 日は伊勢神宮外宮に正式参拝し、日本総院会の開幕祝詞を厳かに奏上した。伊勢神宮参拝をすませた一行はただちに神戸に向かい、同夜は神戸在住の中国人を中心とする百名近い日華の名士達による世界紅卍字会各地代表歓迎会に臨んだ。神戸は日本で初めて道院・紅卍字会が誕生した地ということもあり、夜更けまで歓談が続き和やかな雰囲気の中、日本紅卍字会と日本総院会の開幕行事が終了した。

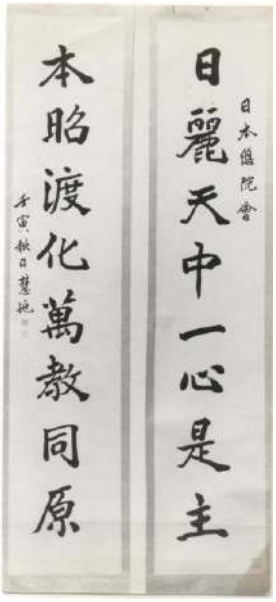

写真 14　開幕式に賜った慧地の書と済仏の画　書の対聯は頭文字が日本になっている。
画は伊勢二見浦のようにも見える。文字は「炁水明六化　吾心是慈航」

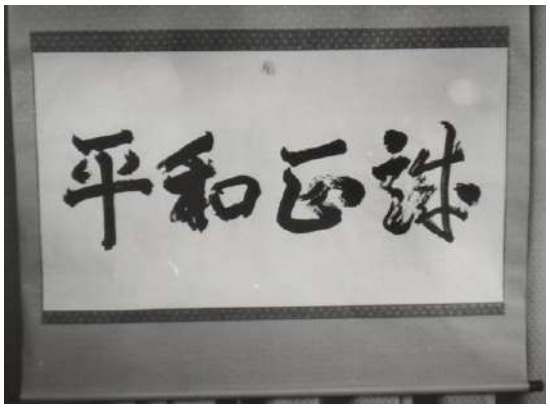

写真 15　誠正和平の扁額

写真 16　開幕典儀を行う大嶋扶化と林出尋賢（後姿）
左端が游篤慧

写真 17　左から林出尋賢・鄒龢昶・游篤慧

写真 18　御神位と山野女史

写真 19　開幕祝賀会の模様

写真 20　挨拶をする王瀾観総処代表

１０．日本紅卍字会発足後のあゆみ

昭和 10 年の大本弾圧による活動停止から数えて、昭和 37 年の日本紅卍字会の設立まで実に 27 年の長い歳月を要した。かつて、日本中に 430 箇所の道院が存在していたが、その実態は大本支部が即ち道院、愛善会が即ち紅卍字会であった。出口悟天は『日本紅卍字月刊』－昭和 35 年 7 月号「日本総院会建設の意義」の中で「当時の我が国における道院・紅卍字会は、中国における道院・世界紅卍字会のような実質的な内容や活動を伴うまでには至っていなかった」と、記している。ここに初めて大本とは密接な関係はあるものの、独立して道院・紅卍字会が発足し歩み始めたのである。その後の経過を以下時系列順に記すこととする。

写真 21　東京総院会外観
（銀座ダイヤモンドビル 3 階）

写真 22　御神位

・昭和 37 年 11 月 8 日(1962 年)、

土屋化同台湾道院に赴き、『太乙北極眞経』漢音日訳、及び日訳訓読・『神咒録』日訳・『道院綱則』日訳・『世界紅卍字会会則』日訳・『女社綱弁事細則』日訳・『演経録白話文』日訳等の翻訳を半年間かけて行った。

・昭和 37 年 12 月 16 日

東京四谷坂町の新築山田ビル 5 階に移転。ビルの屋上に開壇用の六角堂を建設することに持主の了解済みだったが、昭和 38 年 1 月 18 日の処科(総処で下ろされた壇訓のこと)で、「日本総院会は新址に於いて新春に佈道団の来日を請い、開沙して鼓励に資せんとすることの可否」との呈判に対して、済仏より次のような訓が示された。

「日本総院会は明春開沙を請わんとするも、殊に不可能なり。各方が開沙を希望することの急切なるは、吾が師は早くより知り尽くすも、各方の経歴足らず。一旦開沙すれば多く神に依頼することになり、人力はかえって能はざるなり。須らく人が能く道を宏むるものにして、道が人を宏むるにあらざることを知るべし。神霊の感応は其の機を提示するに過ぎず。心を尽くし力を竭(つく)し一切を運籌するは、全て責を負うの掌、監各方に在るなり。将来機縁宜しきときは必定に前往して開沙すべし。しばらく其心を安んじ、以って運化を待つを可とす」

・昭和 38 年末(1963 年)

笹目恒雄(秀和)台湾道院に赴き、游篤慧(ゆうとくけい)・鄒龢昶(すうわちょう)指導のもと半年間研坐誦経す。翌昭和 39 年 7 月『太乙北極眞経』に仮名づけし、日訳も日本語の堪能な台湾修方多数協力のもと完成し、香港総処の呈半許可を得て印刷し奉持帰国した。昭和 39 年 9 月より東京において合坐・合誦が秀和のもと開始された。

・昭和 39 年 8 月(1964 年)

新会長に林出尋賢、責任副統掌に笹目秀和が就任した。

・昭和 39 年 12 月

東京麻布六本木ニュー後藤ビル 4 階に移転。

大嶋扶化・小田秀人(普和、事務顧問)が救世新教の件にて免職となる。

・昭和 40 年 5 月(1965 年)

孚聖訓によって、台湾の游篤慧・鄒龢昶が 5 月 12 日指導のために来日。連日連夜、修坐・誦経・道慈講話が続けられた。5 月 16 日、林出尋賢・出口悟天・呉弈霊を加えた五者で会談し、日本総会の基本方針を決定した。その内容は院会の運営は神示に遵い綱則を守ること。和衷共済すること。修道として修坐・誦経を励行すること。経費節減すること。道院の建設は適当な時期機会ある折に進行させること。重要な決定は、尋賢・悟天・弈霊の三者討議によって行うが、その実行については理事会に図ること。

・昭和 40 年 11 月

遡ること昭和 30 年 2 月 19 日、神戸道院は神戸市葺合区布引町に日本総会神戸分所として更生した。その後、源利製菓株式会社に移転したが、この年、神戸寄修所として葺合区磯上通の大和興業ビル 6 階に開設した。紅卍字会神戸支部長は游水源(正堃(こん))。

・昭和 41 年 1 月 14 日(1966 年)
処科 尚真人訓:
「日本総院会は篤慧、龢昶の佈化せるにより次第に道慈の正軌に入り、各方は道慈の真諦を悟覚せり。も嘉すべきと為す」

・昭和 41 年 3 月
現在の東京総院にある「誠正和平」の謹写彫刻した扁額が完成する。毎月 1 日・15 日、及び毎水曜誦経会が定期的に行われるようになる。

・昭和 41 年 5 月
游篤慧が再来日した。本格的な道院を建設するには、修方の霊を聚めることがまず肝要とし、老祖は以前祀霊室に在日華僑の先霊を祀ることを許可されたが、道院建設の前に日本人修方の先祖を祀ることも大切として、東瀛和方先霊総位を安位し、3 月に奉斎した東瀛華方先霊総位と併せて奉斎することになった。

・昭和 41 年 7 月 12 日
游篤慧・林出尋賢・出口悟天・呉弈霊による四者会談が行われ、炁霊の凝集を図るため合坐合誦を修し、和衷共済の実を結ぶこと、新修方を吸収すること、華僑の修方を拡充すること、神戸道院の建設を促進すること等を決議した。游篤慧は「道慈のお話」の講演を行った。

・昭和 42 年 9 月 10 日(1967 年)
台湾統科尚真人の壇訓により、笹川正謙が東京総院の首席責任統掌に特派された。今後院会の維持と基礎を固めることと、さかんに発展せしめることについて、善く素よりある願を尽くし、徳を立て弘く化すべしと訓示された。

・昭和 42 年 10 月 24 日
処科 黙眞人訓:
「東京総院は成立せしより茲に五周年なるも、各方は未だ人我の見を化除して和衷共済する能はず、人霊よく合一する能はず、感応の力薄弱にして、道慈前途の進展に以って遅延を致すはまことに惜しむべきなり。宜珠は真経感化の妙を明かに悟りて、力強く経常費の支出を支持す。宜珠を維護副統掌に任ずる」

・昭和 43 年 8 月 14 日(1968 年)
処科 黙真人訓 :
「正謙の発願による銀座 5 丁目 3 番地の現日本紅卍字会のダイヤモンドビルへの移転を准許す。9 月 7 日(農暦 7 月 15 日)の正午に遷位せよ。東瀛道慈の基礎を固めよ」

・昭和 43 年 9 月 7 日
銀座 5 丁目 3 番地の現日本紅卍字会のあるダイヤモンドビルへ移転遷位。
積極的に『北極真経』の誦経会が行われるようになる。游篤慧が指導のために来日。

・昭和 43 年 10 月 14 日

処科 黙真人訓：日本院会への警告

「 日本における今次の修坐、誦経会は炁霊一貫し、その功は昭かに無形の動を善く為せり。篤慧の宣導宜しく、演経の無形の融合をなしたるは嘉すべきである。既に一回の災劫は化し去ることを得たるも、なお、災劫の兆しがある故に、畏れ慎み警戒することを望む。日本院会の根其、未だ固まらず、目前の盛況を悦ぶとはいえ、やがて意外なる恐るべき事態が生ずることあり。……堅誠の修方は坐、誦に努力せよ……。佈道団については尚時機を待つべし」

・昭和 45 年 6 月（1970 年）

游篤慧が指導のために来日。

写真 23　昭和 45 年指導のため来日した游篤慧会長（中央）を囲んで、その向かって左 土屋化同・大嶋扶化、左端が青井宜珠

写真 24　游篤慧会長と昕輔夫人（女社社長）

・昭和 45 年 7 月

笹川正謙首席責任統掌が日本紅卍字会の会長に就任した。

・昭和 45 年 7 月 24 日

処科 黙真人訓：

（東京総院 8 周年紀念の前後に、10 日間の佈道団の来日を請う呈判に対して）

「各修方が切実本心から和衷共済に努力して、老祖様の炁胞に合霊することである。……現在機、尚未だ合っていないのである」

8 周年紀念にあたって、林出尋賢は挨拶の中で「合坐・誦経に努め衆心一致炁霊の凝集に精進し、来る 10 周年記念式典挙行の時を目標に、堅誠恒の修行に精進せんことを、同修各位と共にお誓いしたい」と述べた。

青井宜珠は院会が思うように発展しないことに対して「宣院掌籍と指坐の大命ある秀和と、教院掌籍の宜珠の共同責任を痛感し、今後 1 年間のこの不名誉を挽回すべく、粉骨砕身の努力を修方各位に誓約す」と述べた。笹目秀和は、「徒に大本動静を批判し、道院の坐方を大本信徒修方諸君に強要したことは、偏急であり和衷共済の根本義に背くものであった」と大本に対して陳謝した。

・昭和 45 年 11 月 16 日

前会長林出尋賢帰道。89 歳。勲（じょう）承真君を賜る。

・昭和 46 年 1 月(1971 年)
聖典翻訳室開設。責任者を笹目秀和とし、呉弈霊・蒋平沈・根本宏(誠乾)助手等が翻訳を担当することとなった。

・昭和 46 年 5 月 21 日
昭和 38 年ひとまず呈判した聖徳太子・弘法大師・楠木正成・二宮尊徳の四神位は、いずれも宣院に祭祀することが許されていたが、今回さらに伝教大師を加えて五神位を均しく宣院副掌籍兼佈道使者の錫号のもとに奉祀することになり、この日は楠木正成の五献典礼を行った。

・昭和 46 年 6 月
月 1 回の土曜研修会が、責任者を文監岩越平奥として始まった。
台湾の鄒龢昶(首席院監)が 7 月 4 日に 57 歳で帰道した。12 月 12 日には游篤慧(首席統掌)が 75 歳で帰道した。

・昭和 47 年 3 月 6 日(1972 年)
処科 黙真人訓:
(道院建設委員会として正謙を委員長、宜珠を副委員長の元で組織する。港区芝の土地建物を購入し 10 周年紀念式典を挙行し、その際に佈道団派遣要請の呈判に対して)
「正謙、宜珠及び各委員は努力せよ。土地を購入し 10 周年記念の佈道団を迎え、堅誠なる各人が資金や労力を出そうとするのは非常によいことである。ただし、佈道団を派遣することはできない。基礎を定めて、以後人事の因縁によって定めなければならないのである」

・昭和 47 年 9 月 28 日
処科 黙真人訓:
「尋仁は証果せられて以来、枢府に於いて零を運らし弭化し、功績日に増せり。師命にて錫位して、霊績真人、兼中和成化普渡天尊に晋められた。晋昇慶典は東京総院十周年紀念日と同じく盛大鄭重に挙行すべし」
中和成化普渡天尊とは中国と日本とを結びつけて一体のものと化することに成功した真人にして天尊の意。昭和 23 年に帰道後、24 年間の枢府に於ける功績の結果であった。

・昭和 47 年 11 月 6 日
東京総院会十周年紀念式典が、香港・台湾・シンガポール等、海外からの参列者 24 名を加えて参列者総数 130 余名で挙行された。先ず霊績真人、兼中和成化普渡天尊の安位典礼を五献の礼で行い、神位を統院に鎮斎した後、聖像升座紀念日六献典礼、十周年紀念式典が行われた。祭主正謙、海外各代表、大本代表の祝辞、直会、記念撮影の後、72 名で合坐合誦を行った。この年外交面では日中国交正常化が成し遂げられた。

・昭和 48 年 5 月 6 日(1973 年)
出口悟天帰道。71 歳。天霊真子を賜る。

・昭和 48 年秋

笹目秀和は 10 年間の奉仕に区切りを付け東京での活動を終わらせた。これに対して黙真人は昭和 48 年 10 月 17 日の処科で「秀和は和することができずして去って行った」と訓示した。

・昭和 49 年 1 月 14 日(1974 年)

処科黙 真人訓:

「東京総院・紅卍字会、開発の機はいぜん暢びていない、そのしかるゆえんは、日本の習い尊ぶところを以って異なった感じ方をしているからである。吾が道の宗旨は人を救い、世を化し、刼を救い数を挽うのである。金があるものは金を出し、力のあるものは力を尽くすのは、みなこの目標のためになすのであり、個人が宗教、富貴、特権、享楽の人になることを決して望んではいないのである」

・昭和 49 年 5 月

『六箴四誡』、『十誡』、『二四守』、『三十誡』が根本誠乾により編集翻訳された。

・昭和 49 年 11 月(1974 年)

神戸寄修所で毎月第四土曜日に合坐合誦、及び道慈研修会(四土会)が始まる。

・昭和 51 年 8 月(1976 年)

道慈人材養成研修会が青井宜珠のもと 6 カ月の期間で開始された。

・昭和 51 年 10 月 3 日

神戸道院建設委員会設立。5 年計画とし、総予算 6000 万円、土地 50 坪の二階建道院の建設を目指した。

・昭和 52 年 6 月 7 日(1977 年)

処科 黙真人訓 :

「東京総院の道慈人材訓練の第 1 期終了の堅誠恒で熱心な 6 名を道宣長に任命」(笹川正謙会長の辞任願いに対して)「頗る惜しい。宜珠を代理に任命する。宜は義、珠は智慧の珠である」

・昭和 52 年 7 月 7 日

黙真人の訓により青井宜珠が東京総院の統掌、及び東京(日本)総会の会長に任命された。

・昭和 52 年 11 月 2 日

処科 済仏訓 :(東京総院十五周年記念において)

「日本の有形の基は今にいたるもまだ固まっておらず、したがって発展することが難しいのである。各方が今回祝典及び道慈会議に参加し、宜珠の誠と現地の環境に熟知しているを以って如何にして設計し、計画するかの方法の意見書を各代表は皆それぞれ一部を持って参考とするのである。できるだけ成功するように協力するのである」

・昭和 52 年 11 月 11 日

東京総院会創立十五周年紀念式典が、海外各国の代表参列者 80 名、日本側参列者 60 名、合計 140 名の参加で盛大に行われた。式典の後 67 名で誦経が行われた。翌 12 日に道慈会議が開催され、青井宜珠会長が次のような挨拶を行うと共に道院建設の具体的な提案を披露した。

「……過去一時的に道院建築の計画が進められたことがありますが、天の時、人の和などが適合せず、成就するには至らなかった。今回十五周年慶典の道慈会議に際し、済仏訓により道院建築を具体化せよと提起されたことは、当に天の時である……」

提案内容　1. 道院建設の期日を 5 ヵ年とする。昭和 57 年の 20 周年記念まで。

2. 場所は東京都内で環境の良い所

3. 拝殿は 300～350 人を収容できる規模

4. 資金の 85～90％を正謙と宜珠が負担する

・昭和 53 年 7 月 25 日(1978 年)

処科 黙真人訓：

(正謙会長提案の三鷹市下連雀の土地 400 坪、三階建ての建物を道院とすることに対して)

「東京総院の礎に適合する。努力せよ」

・昭和 54 年 1 月 18 日(1979 年)

処科 黙真人訓：

「正謙は宏大な願力を発して良機を握ることを待つのである。神戸寄修所の再建(道院建設)の資金の 65％は、海外を含む各地からの献金で達した。残りを努力せよ。(昭和 56 年 4 月の完成目標)」

・昭和 54 年 6 月 21 日

桜井化煌の提案により、中国残留孤児を対象として日語教室が正式に発足した。中国残留孤児とは終戦の混乱時に、旧満州地区で親達と別れ別れになった人達のことである。「無理をしないでできることから」ということで、中国残留孤児 1 人・2 人に日本語を教えていたが、そこへ講師陣 4・5 名が協力を申し出、さらに中国残留孤児問題連合会も「受講生集めは任せて」と申し出て、この両者の力添えを得て当初予期しなかった規模で発足した。

定員 20 名で月～金までの毎日開講。13 時～15 時。講師陣はボランティア。授業料は無料とし、交通費、文具費を若干支給した。

なお、現在の状況は受講対象者を拡大し、中国大陸からの帰国者(厚生労働省の引き上げ証明書保有者)とその家族、中国からの大学・大学院留学生、配偶者が日本人で在留資格者等となっている。また、授業日は

初級：月～金の午前、中級：月、水、金の午後　期間は 1 年間

定員は帰国者関係 20 名、中国籍 20 名とし、授業料は無料、教材費 4000 円は生徒負担となっている。

・昭和 54 年 7 月

『道院と紅卍字会の歴史』が翻訳完成し発行される。

・昭和 55 年 3 月 7 日(1980 年)
処科 済仏訓：
「昭和 54 年 5 月 21 日の処科黙真人訓「秀和は誠心より発願して『午集正経』に日音をつけ以って東瀛各方が請領恭誦できるようにするのはよいことである。師の命により願いどおり許可する。また本処に代わって台湾で校正印刷するのである」

当訓に遵って日音を一千部印刷し、日訳を校正することとした。

・昭和 55 年 6 月 17 日(1980 年)
土屋化同帰道。73 歳。和化真君を賜る。

・昭和 55 年 9 月 13 日
東京道院建設実行委員会を開催し、建設予算総額 8 億円の内 1 億円を一般修方から募金する方針とした。昭和 57 年の 20 周年が目標であったが進展が見られない。神戸も思うように資金が集まらない。

・昭和 56 年 6 月 26 日
神戸游正堃(こん)会長帰道。劫化了因真子を賜る。新会長に游賢徳が就任した。

・昭和 57 年 7 月 12 日(1982 年)
処科 黙真人訓：
「正謙が復帰し東京総院の発展安定を維護することを望む」
宜珠は会長職を辞任した。秀和は訓示に遵って休職していたが、『午集正経』の日訳で功行を著したことにより復帰した。

・昭和 57 年 10 月 1 日
多摩寄修所が秀和を主任として開設した。開所式に 29 名の参列があり、「霊光合化」の横額を賜った。

・昭和 57 年 10 月 28 日
東京総院会創立二十周年紀念式典が、各国代表参列者 110 名、日本側参列者 48 名、合計 158 名が参列して行われた。69 名で真経を誦経した。

・昭和 58 年 2 月 2 日(1983 年)
処科 黙真人訓： (多摩の創立以来 4 ケ月間 9 名による毎日の誦経に対して)
「秀和ら九子の毎日の間断なき誦経によって化する功効は大きいといえども大劫の重大さを知らないのである。神戸寄修所、東京総院と力を合わせ、霊を合わせ、化を合わせはじめて大きな功効を収めることができるのである。決してこれを軽視してはならない。話はこれ以上言わないが、大劫を化して挽回することができるか否かは、すべては東瀛各修子の省悟に在るのである」

排名辨法上冠四字(母院より授かる道名の上の漢字)は、乾方は「大岳光輝」、坤方は「曦暘的曜」を賜った。

・昭和 58 年 4 月 23 日
宜珠の会長職辞任に伴い、正謙が新会長に就任し秀和は理事に復帰した。宜珠の会長辞任は理事会で受理されたが、事務運営の混乱と財政難のため月刊誌 1 月号は休刊となった。
6 月の理事会で、次郎丸嘉介、遠矢健一、小池潔、野村貞之、中島洋輝が財務委員となった。

・昭和 59 年農暦 8 月 15 日
多摩道院創立二周年記念。多摩寄修所から多摩道院になる。3 日前から真経を誦経する。式典に 56 名参加した。秀和は多摩道院統掌に就任した。

・昭和 60 年 11 月 5 日(1985 年)
多摩道院で求修した岐阜市の修方 40 数名の誦経合坐の便宜を図るため、千葉由適の自宅に岐阜分所が設立された。

・昭和 62 年 6 月(1987 年)
多摩道院は東京多摩道院と名称を変更し、同年 8 月に東京多摩道院の開幕式典が行われた。

・昭和 63 年 6 月 30 日(1988 年)
『宇宙の最高学府』を八幡書店から発行した。翌年 11 月 15 日には『道院は宇宙の真理を究明する最高学府』も同書店から発行した。

・平成元年 2 月 12 日(1989 年)
多摩道院で求修した修方のため、豊福大成の旧宅に成田分所が設立された。

・平成 2 年 2 月 11 日(1990 年)
多摩道院で求修した埼玉・群馬・栃木三県方面 70 数名の誦経合坐の便宜を図るため、折原昀字持家に大宮分所が設立された。

・平成 3 年 5 月(1991 年)
この頃より東京総院で『午集正経』の誦経が始まる。

・平成 3 年 12 月 25 日
出口運霊帰道。93 歳。安心修子を賜る。

・平成 4 年 8 月(1992 年)
東京総院会の祭壇が現在の祭壇となる。

・平成 4 年 10 月 26 日
東京総院会創立三十周年紀念式典が、各国代表 10 名、日本側修方 86 名、合計 96 名が参列して行われた。58 名で『太乙北極眞経』を誦経した。

・平成 4 年 10 月 18 日
成田分所が多摩道院から東京総院の統系下に帰属することが神示により許可された。

・平成 6 年 11 月 1 日(1994 年)
日本語教室に対して、厚生大臣井出正一より感謝状が贈られた。
・平成 7 年 7 月 18 日(1995 年)
笹川正謙帰道。96 歳。次郎丸嘉介(平自)が会長に就任する。

・平成 9 年 1 月 25 日(1997 年)
笹目秀和帰道。94 歳。

・平成 12 年 2 月 4 日(2000 年)
横浜寄修所開設。責任者は副会長の陳由暾。

・平成 13 年 12 月 8 日(2001 年)
青井宜珠帰道。92 歳。

・平成 14 年 11 月 5 日(2002 年)
東京総院会創立四十周年紀念式典が、各国代表 27 名、日本側修方 45 名、合計 72 名が参列して行われた。
40 名で『太乙北極眞経』を誦経した。

・平成 14 年 12 月
横浜寄修所より『聖人賢人言行録』が発行された。

・平成 15 年 5 月 31 日(2003 年)
根本誠乾が会長に就任した。

・平成 16 年 12 月 26 日(2004 年)
埼玉道院、並びに女道徳社が開設した。扁額として「禎祥回根」、女社には「應機乗時」を賜った。
式典には香港と台湾の代表が参列した。もともとは多摩道院の大宮寄修所であったが、平成４年に東京総院に帰属し、この度道院へ昇格した。

・平成 22 年 5 月 2 日(2010 年)
根本誠乾帰道。83 歳。半田晴久(正瑃)が名誉会長、黒川謙介(正備)が会長に就任した。理事会での議決による運営という方針に則り、「道院」・「紅卍字会」・「真経」の商標登録、過去の道慈文献の電子化、海外院会との直接交流の拡大、及び法人改革に伴う公益法人移行申請等を行っている。

写真 25　10 周年記念写真

写真 26　統院 霊績真人御神位

写真 27　献　饌

写真 28　右 米川大本代表
左 長原大本東京本部代表

写真 29　10 周年で挨拶する笹川正謙会長

写真 30　左から蔣洋澈香港代表・正謙会長・
許雅度台湾代表・米川大本代表

写真 31　右から蔣曹英範香港社長
朱型鸞シンガポール社長

写真 32　左 笹目秀和、右 青井宜珠両老修

写真 33　30 周年記念写真

写真 34　30 周年誦経

写真 35　日語教室授業風景

写真 36　平成 19 年日語教室修了式
前列右から、真田先生・佐藤先生
根本誠乾会長・中野慈柚理事

１１．現　在

本会の目的は、災害或いは、生活環境の変化によって支援を必要とする人々に対し、正常な社会人としての生活実現に寄与し、並びに中国古典の思想・哲学や文化を紹介することである。具体的には災害等で被害にあった人達に対しての救済・日本語教室の実施・道徳や慈善に関する啓蒙活動の推進等であり、これらの目的は本会が開設された当初から現在まで一貫していることである。現在本会は、国の法人改革に伴って公益法人への移行申請中であり平成 25 年 4 月 1 日にその登記が完了する予定である。

現在の会員は正会員と準会員合わせて約 800 名、団体会員が約 1 万 6 千名である。定期的に行っていることは、週 5 日の日語教室、常儀礼等の典礼、月 2 回の『北極眞経』及び『午集正経』の合坐合誦会等の開催である。

社団法人日本紅卍字会が設立されて 50 年が経過したが､その間多くの修方の共通の願いは一日も早い道院建設であると共に、総処からの佈道団の来日を契機として道慈を発展させせることであったように思われる。どちらも未だ実現していないが、この間にも海外院会の状況も随分変化し総処からの佈道団の来日は現状では困難な事態となった。道院建設については建設資金として約 3 億円が既に貯蓄出来ていて、まだ十分とは言えないまでもその実現が見通せる状態である。

最後に道院建設について、笹目秀和が『日本紅卍字月刊』昭和 42 年 1 月号の「厳粛なる迎春」で言及した部分を紹介する。

「1924 年(大正 13 年)旧正月 22 日午前 1 時、北京総院に於いて、老祖の訓があった後、孚聖が降壇され、神戸道院創設のため日本に来られた侯素爽さんに対し、

『日本へ赴く重任が再び汝の双肩にかかった。汝は今回が日本に道院を開くべき機と思うかどうか。その時に非ざれば不可なり。午年に至らざれば必ずその他の阻礙が有って停滞すること有り。午年を過ぐれば道機愈〃変ずべし。哈哈』とあったが、これは日本の道院にとって重大意義を有すると同時に、広くはアジア、世界的意義を考察しなければならない重要訓文であることを吾々は新たに感銘を深くするものである。

その時に非ざれば不可なり。この義は 1924 年その時を指しているのではなくして、天来の機が別にあってその機その時でなければ道院創りも駄目なんだよと仰せられているようにも感ぜられる節もある」

この一文に感銘を新たにし、道院建設を実現可能な目標として目前に捉える今、我々はその「時」の早期に来たらんことを祈りつつ、邁進するのみである。

平成２４年(２０１２年)１１月
『道院・世界紅卍字会　日本総院会のあゆみ』編纂委員会
(編纂：岳潤、校正：正備・平在・慈柚)